

7 週

構想した学校とチーム学習の評価

今週の目標：

- ・ 前回のポスターセッションの評価から発見した改善点を活かして、構想した学校を修正する。
- ・ 自分たちのチームの学習を振り返り、今後の進め方を検討する。
- ・ 個人で提出する中間レポートの準備をする。

演習 (1) チームで構想した学校の改善点を確認して修正しよう

>> 06-1 チーム発表の評価(チーム) 前回のポスターセッションで回収した評価シート

チームで理想の学校を構想する中で、教育で取り組んでいるのは基礎基本の重視であったり、地域社会との協力や情報技術の導入であったりすることを学んできました。しかし、ここで注目したいことは、時々政治的社会的な課題が学校教育を動かしているように見えながらも、その底流にある確実な教育の発展です。それを見極めることが教育を考える上で重要です。そこで、前回のポスターセッションの反省から確認できた改善点をもとに改めて基本的な事項を見直して、チームの学校を修正しましょう。

演習 (2) これまでのチーム学習の反省と今後のチーム学習の進め方を検討しよう

>> 06-2 チーム学習の評価(個人) 07-1 後半のチーム学習 07-2 チームの機能不全診断テスト
07-3 チームの規範を作ろう 2(チーム)

今週は学習の折り返し地点に相当しますので、これまでのチーム学習についての反省と、これからのチーム学習の進め方について検討しましょう。

《チームで考えるポイント 例》

- ・ チームの役割分担は適切であったか
- ・ チームの情報交換の方法は適切であったか
- ・ 学習の進め方は効率的であったか
- ・ チームで機能不全に陥りやすい弱点はどこか(07-2 チームの機能不全診断テスト)
- ・ 後半のチーム学習におけるチームの規範 (07-3 チームの規範を作ろう 2(チーム))

など

次週講義終了時提出

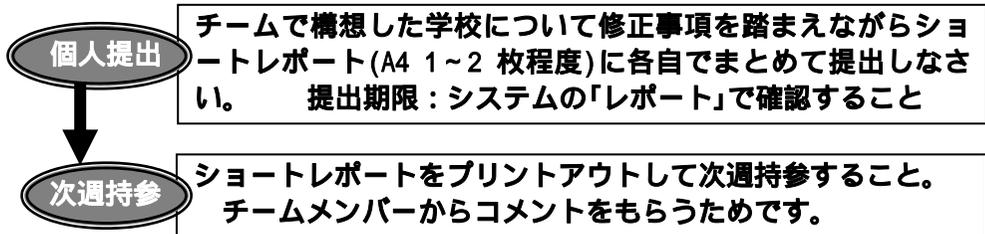
07-3 チームの規範を作ろう 2 (チーム)

講義宿題 (3) レポートを執筆する時のルール

>> 07-4 レポートを執筆する

レポートや論文を書くときには、一定のルールを守らなければなりません。たくさんルールが存在しますが、特に著作権などの人の権利に損害をきたすようなルール違反には気をつける必要があります。参考文献や引用文献、参照 URL(インターネットのアドレス)をしっかりと示しましょう。また、他人の個人ポートレート(写真)を載せないこと、HPの画像や資料を使用するときは許可を得て、出典を明らかにしておくこと、なども気をつけましょう。

- 推奨参考文献1 「だれも教えなかった論文・レポートの書き方」
阪田せい子 ロイ・クラーク 著 総合法令出版 1998.3
- 推奨参考文献2 「レポート・論文の書き方入門」
河野哲也 著 慶應義塾大学出版会 2002.12



今後のスケジュール

7 週目 ポスターセッションの反省、構想の修正、チーム学習を振り返る、中間レポートのプロットを考える

個人課題： 構想した学校のまとめ(A4 で 1~2 枚 = 中間レポート)に学習管理システムに提出

8 週目 チーム内で中間レポートの評価 チーム内で構想した学校の認識のズレを確認

9 週目 メインテーマ「多様な学習者の学力を向上させる」(対象教科：国語，算数・数学) に対して、自分ならどのように取り組むかのサブテーマを決める

個人課題： サブテーマに即した情報を集めて A4 で 1~2 でまとめる

このページは白紙です

チームの機能不全診断テスト



7週目に入って、チーム学習も後半への折り返し地点に差し掛かりました。みなさんのチームは順調に学習できていますか？ それとも徐々に深刻な状況が生じてきていますか？ いずれにせよ、チームワークを形成するということは、とても難しいものだと感じたチームは少なくないと思います。

チームの機能不全のモデル

アメリカで組織と経営チームの強化育成を専門とするパトリック・レンシオーニ(2003)は、著書「あなたのチームは、機能していますか？」(2003, 翔泳社)において、「本物のチームワークはいつになっても実現しにくい」ということと、「組織がチームワークの実現に失敗するのは、自然だが危険な五つの落とし穴に気づかぬうちに陥ってしまうせいである」ということを指摘しています(下線は教材作成者)。レンシオーニは「危険な五つの落とし穴」を下のように図化しています。

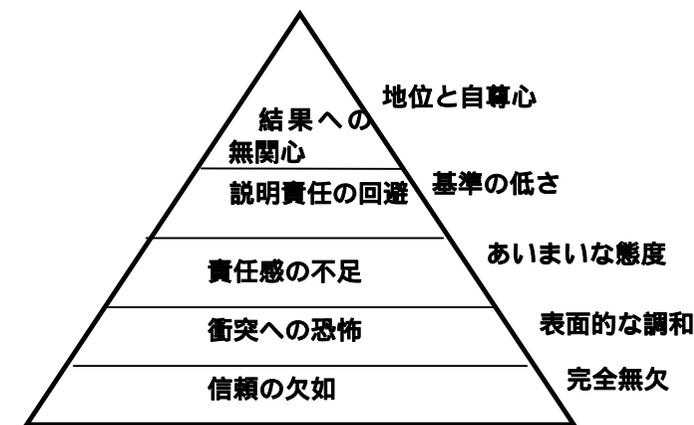


図1 チームの機能不全のモデル
パトリック・レンシオーニ「あなたのチームは機能していますか」p.207より

- 1 信頼の欠如 ...チーム内で自分の弱みを見せないようにすることから生じる。
- 2 衝突への恐怖...腹を割って激しく意見をたたかわせない。あいまいな議論や慎重な発言が多い。
- 3 責任感の不足...表面的に同意をするため、決定を支持し責任をもつことができない。
- 4 説明責任の回避...チームのためにならない行動や態度をとる仲間の責任を問うことをためらう
- 5 結果への無関心...チーム全体の目標より個人のニーズや自分の部門のニーズを優先させる

(以上は「あなたのチームは、機能していますか？」より教材作成者がまとめたもの)

図1は、5つの機能不全が相互に関係していることを示しています。1つでも崩れると全ての機能不全を招く恐れがあるということです。レンシオーニの説明によると、要となる「信頼」が崩れるとたちまち全ての機能は動かなくなります。あなたのチームにどこか気がかりな部分があるとするならば、以上の5つを逆の見方で理解してみてください(例: 2...アイデアをめぐって遠慮なく衝突する)。

裏面のテストは、レンシオーニが著書の中で示しているもので、チームが5つの機能不全にどこまで侵されているかを調べることができます。一人ひとりが取り組み、回答の違いについて議論してみるとよいでしょう。

チームの機能不全診断テスト

3 = いつもそうである 2 = 時々そうである 1 = ほとんどそうではない

(公開にあたって、質問文に関しては省略しました)

「1 信頼の欠如」の点数 = (点)

「2 衝突への恐怖」の点数 = (点)

「3 責任感の不足」の点数 = (点)

「4 説明責任の回避」の点数 = (点)

「5 結果への無関心」の点数 = (点)

それぞれの合計点によって、以下のことがわかります。

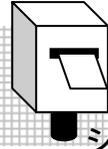
8 ~ 9点...チームに機能不全は現れていないと考えられる。

6 ~ 7点...機能不全が問題になる可能性がある。

3 ~ 5点...機能不全に対処する必要があると考えられる。

出典：パトリック・レンシオーニ(伊豆原弓 訳)「あなたのチームは、機能していますか？」 株式会社翔泳社、2003
チームの機能不全診断テストに関する著作権は株式会社翔泳社に帰属します。
5の機能不全の理解と克服について詳しくは上記の文献を参照してください。

チームの規範をつくろう 2(チーム)



次週
提出
シート

チーム番号() 記入者()

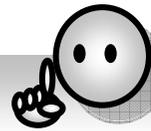
前半のチーム学習から進化した学習形態で進めていけるように、後半のチーム学習の規範を考えてまとめましょう。

>>07-1-後半のチーム学習 参照
>>07-2-チームの機能不全診断テスト 参照

チーム規範のロゴ図案

ロゴの説明

このページは白紙です



レポートの執筆

1. 原稿

ワープロソフトを使用して A4 版の大きさの用紙に報告内容を編集し(文の他にも図や表、写真を使用することも可能)、学習管理システムの「レポート」に提出する。

2. ワープロソフトの設定

用紙設定 : A4 サイズ

文字数と行数 : 40 字 × 30 行(1 ページ 1200 字設定)

文字の大きさ : 見出し以外の本文は 10 または 10.5 ポイントを基本とする

枚数 : ショートレポートは 1~2 枚程度 最終レポートは 10 枚以上

その他書式 : 裏面を参照

3. 執筆内容の見直し

文法の見直し : 「である」調で統一されているかどうか 接続詞は正しいかどうか

分かりやすさ : 同じことを繰り返していないかどうか いたいことが分かるかどうか

3. 提出時の注意

ファイル名

「****レポート」というファイル名で提出する人が多いですが、これではダウンロードした時に誰のファイルかが分からないので、必ずファイル名を「ID 番号-チーム名-氏名」に変更してから提出してください。

再提出の時

提出期限までに時間があるとき、レポートを修正して再度提出することができます。ファイルを指定した後に「コメント」欄に「月 日 再提出しました」とひとこと書き添えてください。

何らかのトラブルで指導者に相談メールを送る時

学習管理システムの「個人情報変更」「メールアドレスの変更」で返事が受信可能なメールアドレスであるかどうかを確認してください。メールアドレスが間違っていたり、古いメールアドレスであったり、すぐに返事が確認できないメールアドレス(例えば携帯に返事が欲しいのに大学のアドレスを登録していた場合はすぐに返事を確認できません)だったときは、すぐに連絡できなくなりますので気をつけてください。

原稿の書式

↑ 余白 上下左右 20～25 mm

タイトル(12ポイント or 14ポイント)
 学籍番号 学科 回生 チーム番号 構想した学校・幼稚園名
 氏名

1. (「はじめに」 など)
 内容ごとに小見出しをつけて、整理して書く。1つの小見出しにつき、何十行も書いてしまうと大変読みづらいので必要ならば「小見出しの小見出し」を付けてもいいので、コンパクトにまとめるように心がける。

7 週目のショートレポート(1回目)で書くこ

2. (「構想した学校の特色」 など)
 (構想した学校の特色などを整理して説明する)

2 回目のショートレポートや最終レポートでは、このような方法で記述します。

3. (「検討したい教育課題」 など) 以下例文です。
 私たちの学校は、主に学力低下の問題に注目している¹。……
 ……荻谷(2002)²は、2001年11月に関西都市圏で小中学生を対象に「学力テスト」と「生活・学習アンケート」を実施し、1989年に大阪大学のグループが実施した調査結果とを比較している。荻谷は、この調査により社会的階層によって学力の格差が生じていることを明らかにしている。……文部科学省は、ホームページで「子どもたちの学力の現状」を公開している。³……吉崎(2004)は、「教育の方法と技術」の中で「一人ひとりの子どもに基礎的な学力を培うためには、子どもの学年段階、教科の特徴、単元内容、教職員の人数などを考慮しながら、多様な学習指導法を導入する必要がある」と述べている。⁴このように……

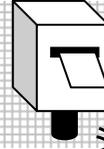
¹ どのような教育問題を取り上げたのかを明確にする。その上でどのような学校を構想したのかを説明するとよい。

参考文献・URL (2・3 参考にした文献・URL は以下のように記述する)
 荻谷剛彦ほか(2002)「岩波ブックレット No.578『学力低下』の実態」岩波書店
 文部科学省「子どもたちの学力の現状」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/genjo.htm (2004.11.8 アクセス)

引用文献 (4 文献の一部を引用した場合は必ず出典を記述する)
 吉崎静夫(2004)「学力と学習の自己責任」『教育の方法と技術』ミネルヴァ書房 p.67 (複数ページの場合は「pp. - 」)

↓

チームの機能不全 診断テスト結果(チーム)



提出
シート

チーム番号()

「07-02 チームの機能不全診断テスト」の結果を以下の表にまとめてください。

氏名を書いてください	「1 信頼の欠如」の点数	「2 衝突への恐怖」の点数	「3 責任感の不足」の点数	「4 説明責任の回避」の点数	「5 結果への無関心」の点数

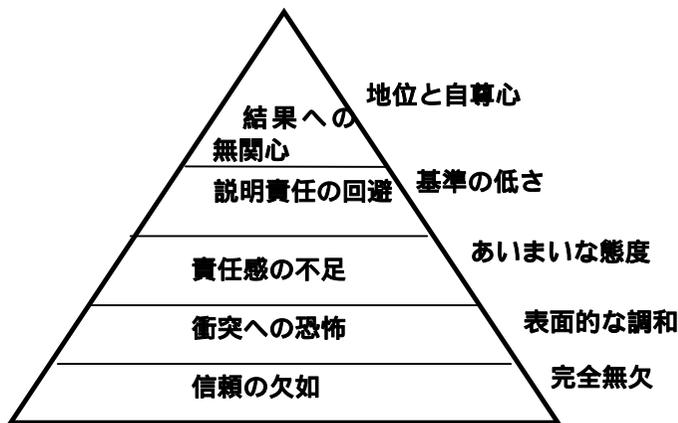


図1 チームの機能不全のモデル
P. トリック・レンシオーニ「あなたのチームは機能していますか」p.207 より

- 1 信頼の欠如 ...チーム内で弱みを見せないことから生じる。
- 2 衝突への恐怖...腹を割って激しく意見をたたかわせない。あいまいな議論や慎重な発言が多い。
- 3 責任感の不足...表面的に同意をするため、決定を支持し責任をもつことができない。
- 4 説明責任の回避...チームのためにならない行動や態度をとった仲間をとがめるのに躊躇する
- 5 結果への無関心...チーム全体の目標より個人のニーズや自分の部門のニーズを優先させる
(以上は「あなたのチームは、機能していますか?」より教材作成者がまとめたもの

- 8 ~ 9点...チームに機能不全は現れていないと考えられる。
- 6 ~ 7点...機能不全が問題になる可能性がある。
- 3 ~ 5点...機能不全に対処する必要があると考えられる。

このページは白紙です

8 週

ショートレポートから学ぼう

今週の目標：

- ・チームでショートレポートをお互いに評価しあう
- ・後半のチーム学習の規範を確認する
- ・『『学力低下』の実態』を読む分担を話し合う

演習 (1) チームでショートレポートをお互いに評価しあう

>>08-1-私のレポートを評価してください

チームメンバーに自分のショートレポートを評価してもらおう。それぞれのメンバーがまとめたショートレポートを評価し合いながら、チームで構想した学校について認識にズレがないかどうかを確認します。また、すでに個人的な主張が記述されている場合には、構想を改善するための手がかりになりますし、自分の主張を形成するときの参考にすることができます。自分のレポートを改善するために、チームメンバーのレポートから学び、誠意をもってコメントしましょう。(このショートレポートは最終レポートの第1章になります)

レポートを読んだら「08-1 私のレポートを評価してください」にコメントを記入して他のメンバーに渡しましょう。

演習 (2) 後半のチーム学習の規範を確認する >>07-3-チームの規範をつくろう2(チーム)

前回の講義で、これからの学習形態が前半のチーム学習(集合型)から後半のチーム学習(分散協力型)へと変化していくということを学びました(「07-1-後半のチーム学習」)。また、レンシオー二の「チーム学習の機能不全診断テスト」にメンバー全員が取り組み、チーム学習がどのような段階でつまづいているのか、またつまづきそうなのかを確認しました。これらを利用して、今後のチームが「分散協力型」で学習できるように、個人学習を強化するチーム学習の新しい規範を確認しておきましょう。

提出

07-3-チームの規範を作ろう2(チーム)

講義 (3) 個人テーマを決めるための準備をする

演習
宿題

>>08-2-多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために一国語、算数・数学

教育の長い歴史の中で、多くの先人たちが「子どもの学び」についてさまざまな原理を

開拓してきました(西之園晴夫・宮寺晃夫編「教育の方法と技術」第1章参照)。みなさんも、理想の学校を構想する中で学校教育の問題点や評価する視点についてチームメンバーと調べたり考えたりしてきました。これからは、一人ひとりが今までよりもさらに具体的に「子どもの学び」をどのように捉え、そしてどのような方法で子どもに関わるのかを考えていきます。

チームで意見を交わしやすくするために、「国語の学力」と「算数・数学の学力」という具体的な教科に限定して考えてみましょう。チームで共有するメインテーマを「さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりの学力を高めるための学習指導法を提案する(対象教科：国語，算数・数学)」と設定します。ここで「さまざまな学力レベルにある学習者」のことを以下では「多様な学習者」と呼びます。メインテーマに対して、自分ならどのように取り組むかということの後半のすべての週に渡って考えていきます。(その時に国語か算数・数学いずれかを選択します)

今週は、具体的なデータを使用して国語と算数・数学の学力の実態について説明されている、苅谷剛彦ほか「『学力低下』の実態」(岩波ブックレット)をチームで分担して読む打ち合わせをします。

学習の手順の詳細は「08-2-多様な学習者一人ひとりの学力を高めるためにー国語，算数・数学」をよく読んで進めてください

次回までに

・2人以上でペアになって、「『学力低下』の実態」の第部にある6項のうち2項選択して熟読し、次週に他のメンバーに報告できるように準備する

1人1項ずつ担当する方法でも構いません

今後のスケジュール

- 8 週目 チーム内で中間レポートの評価 チーム内で構想した学校の認識のズレを確認
共通テーマ「多様な学習者の学力を向上させる」(対象教科：国語，算数・数学)に対して、
自分ならどのように取り組むかの個人のサブテーマを決める準備をする
チームの課題：2人以上でペアになって、「『学力低下』の実態」の第部にある6項のうち2項選択して熟読し、次週に他のメンバーに報告できるように準備する
- 9 週目 チームの中で分担して読んだことを報告しあいながら、学力低下の実態について考える。共通テーマ「多様な学習者の一人ひとりの学力を高める」(対象教科：国語，算数・数学)に対して、自分ならどのように取り組むか(サブテーマ)を決める(最終レポートの第2章になる)
個人課題：各自のサブテーマに即した情報を集めて自分の考えをA4で2~5枚でまとめる
- 10 週目 チームで「国語・算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」を決めてまとめる
チーム学習管理システムに提出：A4 2枚で「国語・算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」を提出
- 11 週目 **第2回チーム発表**…学団内でチームレポートを発表
提出したレポートをこちらが印刷しますので、それを使って他のチームに発表してください
冬休み(課題：チーム学習の評価2 チーム発表の評価2 できるだけレポート執筆を進める)

私のレポートを評価してください

チーム番号() 月 日() レポート執筆者氏名()

私のレポートを読んで下さりありがとうございます。私のレポートを読んでみて、よかった点と、改善を要する点を1点ずつコメントしてください。よろしくお願いいたします。

評価者氏名()

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名()

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名()

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名() 「良かった、是非参考にしたい」という点： 「こうしたらもっといいよ」と感じた点：
評価者氏名() 「良かった、是非参考にしたい」という点： 「こうしたらもっといいよ」と感じた点：
評価者氏名() 「良かった、是非参考にしたい」という点： 「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

どうもありがとうございました。

多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために —国語, 算数・数学

活動案内

後半の学習では主に「多様な学習者の学び」をどのように捉え、どのように関わるのかを考えます。そのために、チーム全体で「さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりの学力を高めるための学習指導法を提案する(対象教科: 国語, 算数・数学)」という共通テーマを持ちながら、最終的には個人で具体的なサブテーマを持ってまとめ、最終レポートの一部として提出します。

学習を次の4ステップで進めていきましょう。

Step 1 「『学力低下』の実態」の第 部を分担して読んで報告しあう 8週目・9週目
「『学力低下』の実態」(荻谷剛彦ほか著 2002年 岩波書店)を各チームに渡します。分担した部分を読み、内容を要約した資料を用意してメンバーに説明します。

分担を決める

6項あるので、1人で1項担当して読むか、2人で2項担当して読むなど、どのように分担して読むか決めてください。

他のメンバーに報告するためにまとめる

それぞれが読んだ内容を報告して第 部を理解する

Step 2 1人ひとりが、メインテーマにどのように取り組むのか(個人のサブテーマ)を決め、ショートレポート(A4 2~5枚)にまとめる。 10週目

国語, 算数・数学のいずれかを選択する

サブテーマを明確にする

例: 「中学・国語で文章力を強化するために到達度評価を開発する」
対象者(誰に) 具体的な学力(何を) 方法(どのように)

Step1 で得た知識を利用しながらサブテーマについてショートレポートをまとめる

- ・「国語の学力」, 「算数・数学の学力」をできるだけ明確に定義する
- ・インターネットや文献などから、国語や算数・数学の学力を向上させるための具体的な取り組みの例
- ・「さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりが学ぶために、自分ならこうする」という提案

注意 必ずプリントアウトして次週持参してください。

Step2 でまとめた個人のショートレポートを輪読してコメントしあう

Step 3 第2回チーム発表で「多様な学習者の国語，算数・数学の学力低下に対する本校(構想した学校)の方針」を他のチームに説明する 11 週目

Step3 までの内容を踏まえて、再びチームで構想した学校を展開する。テーマは「さまざまな学習者の国語，算数・数学の学力低下に対する本校の方針」

の内容をチームで A4 で 2 枚にまとめて学習管理システムに提出(時間厳守)
学習管理システムに提出されたチームレポートを用いて学団ごとで発表

Step 4 Step 3 までの学習を見直して最終レポートの第 2 章としてまとめる 11 週目～

Step3 までの学習を総括して、最終レポートの第 2 章として A4 5 枚以上でまとめる。
その他の章と合体させて最終日に学習管理システムに提出する。

第 2 章は最終レポートの中でも一番重要な位置を占めているので、冬休みを使って見直すなどして時間をかけてしっかりまとめていきましょう。

日本の子どもの学力

PISA2003 と TIMSS2003 を読み解く

わが国は 20 世紀においては世界でもっとも教育に成功した国でした。それは江戸期に庶民教育としての手習い塾あるいは寺子屋が発達していましたが、明治時代になっても庶民の教育熱は高いものがありました。明治初期に京都では町衆が自分達で学校を設置するなどの活動があり、その後わが国の教育は発展の一途をたどりました。それは社会が安定し、経済も発展する時代において成功した教育でした。

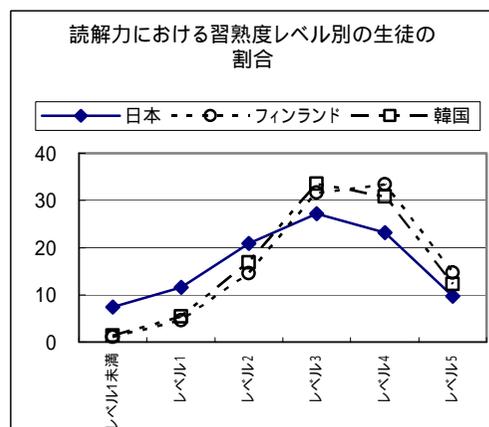
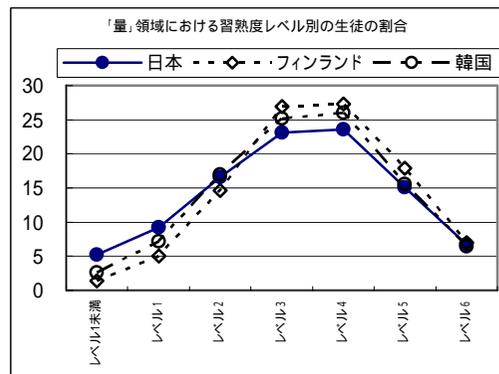
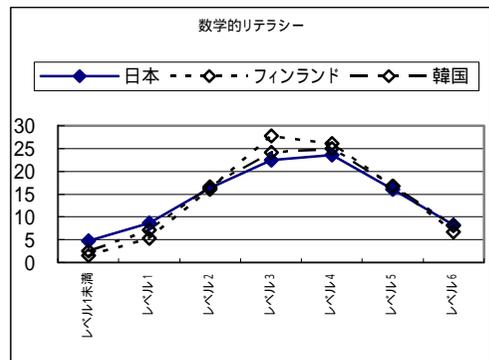
しかし 21 世紀を迎えてその前提があやしくなっています。それは社会が絶えず変動し、さまざまな背景と経験をもつ多様な人々が教育にかかわり、入学してくる児童生徒も多様になってきているのですが、そのような状況に適応できる教育になっているかどうかという問題です。従来とはまったく違った社会になったとき、これまでの優等生であった日本の教育制度がうまく機能するのかどうかということが問題になっています。しかしこのような事態は日本だけの問題ではなく、世界の国々が当面している問題でもあります。

昨年暮れにパリに本部のある OECD(経済協力開発機構)が発表した「生徒の学習到達度調査(PISA)」の 2003 年調査の結果が公開されました。さらに国際教育到達度評価学会(IEA)が実施した国際数学・理科教育動向調査の 2003 年調査(TIMSS2003)が公開されて、その結果が話題になっています。この 2 つの調査のデータを使用して、わが国が当面している問題を考えてみましょう。

調査結果のデータから代表的なものだけを選んで、解析した結果を紹介します。この調査は 15 才の生徒、わが国では高校 1 年の生徒の学力を読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーを主要 3 分野として調査したものです。すなわち生徒達は義務教育相当(国によって違いがあります)をどのような学力を習得して修了したかを調査したものです。以下のグラフはいずれも学習到達度調査 PISA のデータから作成しました。このようなデータを解釈するときには重要なのは、どのような視点で情報を読み取るかです。新聞報道などでは世界で何位であるかということしか報道されません。それによると数学的リテラシー全体では 1 位グループです。「量」領域は 2 位グループ、「空間と形」領域は 1 位グループ、「変化と関係」領域は 1 位グループ、そして「不確実性」領域では 2 位グループとなっていて、依然として上位を占めています。読解力では 14 位とかなり低いことが明らかになって話題になっています。しかしもっと気になることは、その成績の分布と年度にみられる変化の状況です。今回の調査で特に注目されるのはフィンランドと韓国ですが、それと日本とを比較してみました。数学についてこれらの国と調べてみるとレベル 1 未満、レベル 1、レベル 2 などでは日

本より低い割合です。すなわち下位の成績の子どもの割合が少ないという点です。

教育レベルの平均点が問題になるときに、高いレベルの割合を増やすことに力をいれるのか、あるいは低位の子どもの指導に力をいれて平均値を高めるのかが問題になります。最終的には平均値ですからどちらに力をいれても順位は上昇します。すなわち学力を向上させるといったときに、上位の子どもだけでなく低位の子どもにも力を入れることが大切であるということに気づきます。変動する社会にあっては、その社会からの脱落者を出さないためには下位の子どもに対する配慮がとくに大切です。なかでも読解力が低いことはその後の学習に大きな支障となることが予想されます。これまでわが国の教育は、均質な子どもにたいしてとくに格差のない教育が行われてきたと信じられているのですが、その前提が成り立たなくなっています。低水準であるとみなしているので、その水準に達している割合を問題にしています¹。以上のような視点からまとめると、15才までの教育の成功率は下の表のようになります。これによると日本とフィンランドの間にはかなりの教育格差があるといつてよいでしょう。



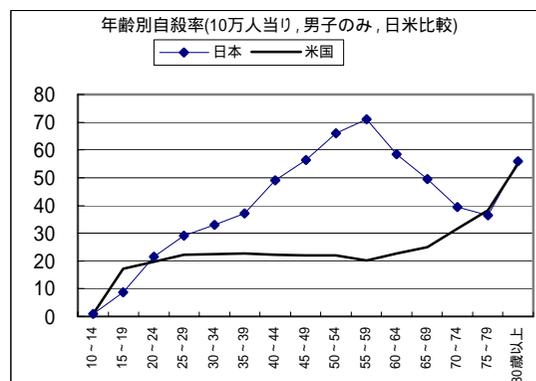
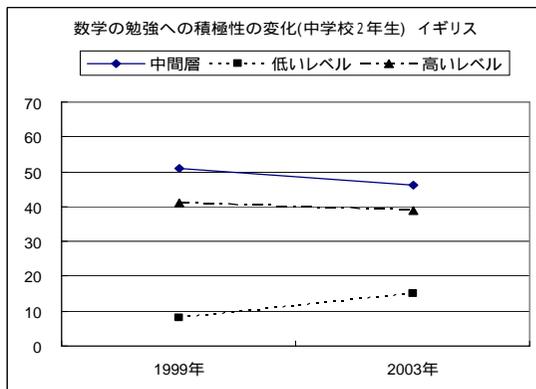
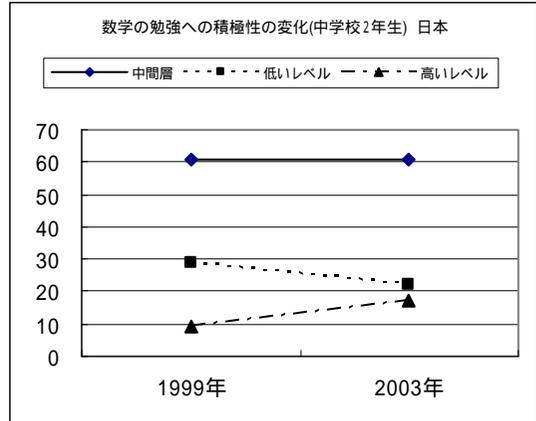
	数学的リテラシーレベル2以上	「量」領域のレベル2以上	読解力のレベル3以上
日本	86.6%	85.1%	60.1%
フィンランド	93.2%	93.4%	79.8%
韓国	90.4%	90.2%	76.5%

¹ <http://www.minedu.fi/minedu/education/pisa/results2003.html>

次に示したのは「数学の勉強にたいする積極性」の変化の様子ですが、日本では高いレベルの子ども達は積極性が高まっていますが、低いレベルの子ども達ではむしろ下がっています。すなわち高位レベルと低位レベルの2極化が進みつつあります。ところがイギリスでは低位グループの子ども達が積極性を高めています。イギリスでは学年制を廃止してレベル制にしましたが、どのようなレベルであっても自分の実力に見合った学習ができるようになってきているのです。どのレベルの学習をするかは自分で決めることができるのです。そのような学習形態は、学年制を存続したままでも実現できますから日本でも可能です。

情報社会は失業と転職が日常化する変動社会ですが、男子の自殺者での10万人当たりでは中高年でアメリカの3倍以上であり、しかもその理由は生活・経済問題なのです。いまヨーロッパの教育改革で問題になっているのは持続的雇用可能性(Sustainable employability)をどのように確保するかです。また16-24才での失業者、不本意な就職者、ホームレスにたいしてどのようなメディアを利用すればアクセスできるかということから若者達のためにケータイを利用したm-learningの研究が進められています。先進国が取り組んでいるのは、このように変動社会に適應できない人達のためにどのようにICTを活用するかという問題です。成績の順位や設備充実率にこだわるのは発展途上の教育政策でしかありません。

わが国では習熟度別クラス編成を実施したり、学校教育に競争原理を導入しようと



Honkawa Data Tribune 社会実情データ図録
<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>より作成

する動きがあります。しかし、さまざまな実力の人が混在しても、先輩のしぐさや動作を見てお互いに学ぶということは、日本古来の稽古事や武道などでの教育方法でした。正統的周辺参加はわが国の伝統的な学びにあった当たり前のことです。師匠もさまざまなレベルの人に合わせて指導することはごく普通のことと考えられていました。最近の情報通信技術の発達は、学習者が相互にコミュニケーションでき、多人数であっても学習を自己管理することを可能にしています。このような状況から考えても、学習は他人との競争ではなく、自律と協調を基盤として一人ひとりが自分の能力の限界に挑戦するような学習環境と、お互いに尊敬し合いながら協働するチーム学習を実現することが大切です。では教科の指導で具体的にどのようにすればいいでしょうか。

9 週

個人の学習課題を決める

今週の目標：

- ・ 「『学力低下』の実態」の内容を報告しあう
- ・ さまざまな取り組みを検討する
- ・ 報告しあった内容をふまえて個人で取り組む学習課題を考える

演習 (1) 「『学力低下』の実態」の内容を報告し合う

>>09-1-「『学力低下』の実態」を読む

分担して読んだ「『学力低下』の実態」の内容を他のメンバーと報告しあって、「『学力低下』の実態」で示されている問題を理解しましょう。

報告で理解した内容を「09-1-『学力低下』の実態を読む」や「09-1-『子どもを取り巻く・・・』を読む」にまとめましょう。

演習 (2) さまざまな取り組みを検討する

共通テーマから個人テーマを考えるために、まずチームで今話題になっているさまざまな学習指導方法を例に取り上げて、それぞれの長所と短所とを整理してみましょう。

演習 (3) 個人で取り組む学習課題を決める

>>08-2-多様な学習者一人ひとりの学力を高めるためにー国語，算数・数学

(1)で報告しあった実態と、(2)で列挙したさまざまな取り組みの長所と短所とをふまえて、多様な学習者一人ひとりの国語や算数・数学の学力を高めるために、あなたならどのように取り組むかの個人課題をたてて、ショートレポートにまとめてください。まず、国語か算数・数学のどちらかを選択し、サブテーマの中に、対象(誰に何を 例：中学・国語)、具体的な学力(どんな学力を 例：文章力)、方法(どのように 例：到達度評価)を明確に決めましょう。明確なテーマかどうか不安を感じたら、チームメンバーに相談しましょう。

「08-2のstep2をよく読んで進めてください」

個人提出

さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりの国語や算数・数学の学力を高めるために、具体的にどのように取り組むかをショートレポート(A4 2~5枚程度)に各自でまとめて提出しなさい。

次週持参

ショートレポートをプリントアウトして次週持参すること。チームメンバーからコメントをもらうためです。

今後のスケジュール

9 週目 チームの中で分担して読んだことを報告しあいながら、学力低下の実態や幼児教育の実態について考える。共通テーマ「多様な学習者の一人ひとりの学力を高める」(対象教科：国語，算数・数学)に対して、自分ならどのように取り組むか(サブテーマ)を決める(最終レポートの第2章になる)

個人 Home Work : 各自のサブテーマを決めて自分の考えを A4 で 2~5 枚でまとめる

10 週目 「国語・算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」をチームで決めてまとめる
チームとして学習管理システムに提出 : A4 2枚以内で「本校の方針」を提出

11 週目 **第2回チーム発表**・・・学団内でチームレポートを発表
提出したレポートをこちらが印刷しますので、それを使って他のチームに発表してください

冬休みの課題：

- ・チーム学習の評価2
- ・チーム発表の評価2
- ・最終レポートの下書き(目標レポートレベルの設定)
- ・できるだけレポート執筆を進める

「『学力低下』の実態」を読む

チーム番号() 月 日() 氏名()

「『学力低下』の実態」(苅谷剛彦ほか, 2002, 岩波書店)の第 部で分担して読んできた結果を報告しましょう。それぞれの報告を聞いて、およその内容や重要だと感じる点を次の記入欄にまとめましょう。

1

2

3

4
5
6

メモ(全体を通して気づいたことなど)

.....

.....

.....

.....

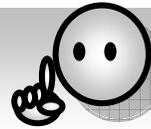
.....

.....

.....

.....

国語，算数・数学の学力を高めるための さまざまな取り組みを検討する



内容説明

「多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために」という、大きなテーマを一度に解決するのは、大変困難なことです。みなさんが「自分ならこのようにする」という具体的な課題に取り組む時の参考にするために、チームでさまざまな学習指導方法を例に取り上げて、それぞれの長所と短所を整理してみましょう。

個別指導や個別学習教材

国語，算数・数学の基礎学力を育てるための指導法に、どのようなものがあるでしょうか。「個に応じた指導」、「きめ細かな指導」ということがしばしば主張されていますが、従来の市販教材や通信教育の教材でもこうした個別学習を可能にするよう配慮していますし、学習塾でも個別指導方式が急激に増えています。このように、「一人ひとりが学ぶ」ということを意識したものについて考えるために、次の課題にチームで取り組みましょう。

1. 次の方法についてチームで話し合い、長所と短所をあげなさい。

個別指導

個別学習用教材の共同開発と利用

市販の個別学習用教材の利用

ゲームやドリルソフトなどの自学用ソフトの利用

その他()

少人数授業，ティームティーチング，習熟度別指導

新学習指導要領に対応して2002年1月17日に文部科学省が出した「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」では、「新しい学習指導要領のねらいとする児童生徒の確かな学力の向上」のために5つの方策を示しています。その中の1つである「きめ細かな指導で、基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身に付ける」という方策については、「教科ごとの学習状況に応じて、少人数授業や習熟度別指導など個に応じた指導を大幅に取り入れる」という説明がされています。

2003年2月3日に文部科学省が発表した「公立小・中学校における教育課程の編成状況等の調査結果」によると、2002年5月に習熟の程度に応じた指導を行っている小学

校・中学校は6割を超えています。ただし、指導方法には3種類のタイプがあり、それぞれの内容は

類型 A: 例えば2学級を3つの学習集団に分けるなど学級の枠を超えて、習熟の程度に応じた学習集団を編成し、それぞれの学習集団を異なる教師が指導する場合。

類型 B: 1学級を2つ以上の習熟の程度に応じた学習集団に分け、それぞれの学習集団を異なる教師が指導する場合。

類型 C: その他(例として、1学級を単位とし、1人または複数の教師が、個人や学習集団によって、習熟の程度に応じて課題等を変えるなどの指導を行う場合など。)

と例示されており、小学校では類型Cのパターンでチームティーチングと絡めながら実施することが多く、中学校では類型Bのパターンで少人数授業の形で実施することが多いとされています。類型Cの()内の具体例の一つとして個別指導や個別教材の開発が考えられますが、これらと類型AとBとは明らかな違いがあります。類型AとBは習熟度別の学習集団に分けて一斉指導を行っているという点です。

以上の調査結果からは、教育現場で少人数授業やチームティーチングや習熟度別指導を行っている小学校や中学校が多いことが明らかになっていますが、この状況について佐藤学(2004)は批判的な視点を提供しています。

2. 資料を参考にしながら少人数授業, チームティーチング, 習熟度別指導の長所と短所を挙げなさい。

10 週

第2回チーム発表の準備をしよう

今週の目標：

- ・ 各自準備したショートレポート(2~5枚)をチームでお互いに評価しあう
- ・ 「国語、算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」を考えてチームとして報告するためにA4 2枚にまとめる。

演習 (1) 各自のショートレポート(A4 2~5枚)をチーム内でお互いに評価しあう

>>10-1-私のレポートを評価してください 07-4 レポートの執筆

チームメンバーに自分のレポートを評価してもらったり、チームメンバーのショートレポートを評価しよう。内容を評価するときは、前回報告しあった資料の内容や自分が調べたデータなどと照らし合わせてみてください。また、内容だけでなくレポートの書き方の様式、文章の表現の仕方や参考文献の示し方なども「07-4 レポートの執筆」で指定している様式に相当しているものであるかどうか確認していくと親切でしょう

レポートを読んだら「10-1 私のレポートを評価してください」にコメントを記入して他のメンバーに渡しましょう。

演習 (2) 本校の方針を決める(第2回チーム発表の準備)

ショートレポートでは、一人ひとりが「多様な学習者の学力を高めるために」という共通テーマからサブテーマを設定して、具体的な指導方法を考えました。それを踏まえて、チームで構想した学校における具体的な指導方法を考えて、次週他のチームに発表し、評価してもらいましょう。

「国語、算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」を、それぞれA4で2枚までにまとめてチーム代表が学習管理システムに提出しましょう。

チーム発表の要領・・・6週目のテーマの資料裏「06-00-2 今回の講義の流れ」参照

チームレポート提出時の注意

- ・ 必ずファイル名を「チーム番号 - 学校・園名」に変更してから提出すること。
- ・ 2枚を超えないこと。
- ・ 先頭に、方針がよくわかるタイトル、チーム番号、学校・園名、メンバーを入力しておくこと。

チーム代表
学習管理システ
ムに提出

(小・中・高) 国語、算数・数学の学力を向上させるための本校の方針
(保・幼) 多様な能力を発揮して学べる子どもを育てるための本園の方針
以上のテーマについてチームでどのように取り組むかを A4 2枚までにまとめてチーム代表として技術係が提出しなさい。
これを発表時の資料とします。

今後のスケジュール

10 週目 (小・中・高)「国語・算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」
(保・幼)「多様な能力を発揮して学べる子どもを育てるための本園の方針」
を各チームで決めてまとめる

チーム代表が提出：A4 2枚で「本校、本園の方針」を提出

11 週目 **第 2 回チーム発表**・・・学団内でチームレポートを発表
提出したチームレポートを授業担当者の責任で印刷しますので、それを使って他のチームに発表してください

冬休み課題：

- ・チーム学習の評価 2
 - ・チーム発表の評価 2
 - ・最終レポートの下書き(目標レポートレベルの設定)
 - ・できるだけレポート執筆を進める
- 次週レポートをプリントアウトしてきてください

12 週目 冬休みに執筆したレポートを評価しあう(チェックリストを用いる)

13 週目 レポートに関する質問受付 最終チェック

私のレポートを評価してください

チーム番号() 月 日() レポート執筆者氏名()

私のレポートを読んでくださりありがとうございます。私のレポートを読んでみて、よかった点と、改善を要する点を1点ずつコメントしてください。よろしくお願いいたします。

評価者氏名()

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名()
「良かった、是非参考にしたい」という点：
「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

上記の評価から改善点をまとめると・・・

内容に関する改善

レポートの様式に関する改善

どうもありがとうございました。頑張りましょう。

11 週

第2回チーム発表

他のチームと指導方法を考えよう

今週の目標：

- ・ チームで考えた具体的な指導方法を他のチームに納得してもらえるように発表する。
- ・ 他のチームの発表内容から学べる部分を見つけ、検討する。

演習 (1) 各発表ブースの代表者で発表前の打ち合わせをしよう。

>>06-00-2 第6週目テーマのプリント裏面「今回の講義の流れ」参照

第6週目に行ったチーム発表と同じ要領で発表を進めていきます。効率よく発表したり、ディスカッションしたりするためのルールや司会やタイムキーパー役を決めておきましょう。
発表要領は06-00裏面「今回の講義の流れ」をよく読むこと

演習 (2) 本校の方針を他のチームに伝えよう

後半のチーム学習では、「多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために」という共通テーマに対して、「国語、算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」について具体的にどのように取り組むのかを考えてきました。その学習成果を他のチームに評価してもらったり、他のチームの考えを評価する中で、お互いに考えた学習指導法を検討しましょう。

注意!!

- ・ 聞きながら「評価シート」にコメントを記入します。評価シートは全てのチームの発表が済んでから一斉に交換します。
- ・ とにかく時間を守ること。タイムキーパーは忘れずに時間を知らせるようにしましょう。

宿題 (3) 発表の反省とチーム学習の評価 (冬休みの宿題)

>>11-01 チーム発表の評価2(チーム) 11-2 チーム学習の評価2(個人) 11-3 チームの機能不全診断...

他のチームからもらった評価シートを参考にして、チーム発表の評価をします。また、これまで一人ひとりのメンバーがどのようにチームの中で学習してきたのかを振り返って、最終段階の学習に活かしましょう。

11-1 チーム発表の評価2(チーム)

11-2 チーム学習の評価2(個人) 記入しておく

11-3 チームの機能不全診断テスト結果2(チーム) テストしておく

「07-2 チームの機能不全診断テスト」にそれぞれ再度取り組んで結果をまとめてください

次週提出

題 (4) 最終

レポートの構成 (冬休みの宿題) >>07-4 レポートの執筆 11-4 最終レポートの構成

最終レポートの提出締切はこの講義の最終日の 23:50 となっています。効率よく質の高いレポートを執筆するために、しっかりと構成を考えておきましょう(提出しながら修正しても構いません)。最終レポートは 10 枚以上書くことが求められますが、これまで 2 回執筆してきたショートレポートを修正して利用すれば、それほど苦になる枚数ではありません。これまでのショートレポートを修正して利用することによって、最終レポートの 1 章と 2 章を質の高い内容にすることができます。

また、どのようなレベルを目指して最終レポートを執筆するのも考えておきましょう。高得点を目指すならば高いレベルを設定して、そのレベルで決められている条件を満たしたレポートを書くことになります。それによってレポートの評価が決まります。

目標レベルと到達条件 ()内に示す点数は出席点が満点の場合のもです

レベル A' (目標 90 点台)	教科書やさまざまな文献や資料を参考にして、自分なりの考え方を論理的に展開して説得力がある(上位 10 名程度)
レベル A (目標 80 点台)	教科書と配布資料とその他 2 冊以上の文献を参考にして説得力のある文章にする
レベル B (目標 70 点台)	教科書と配布資料(ブックレットも含む)を参考にしてレポートを作成する
レベル C (目標 60 点台)	出席は十分しているがレポート作成に時間をかけることはできないのでとりあえず提出する

冬休み中に

11-4 最終レポートの構成 裏面

最終レポートの執筆をすすめておく

できたところまでをプリントアウトして次回持参してください

次回チェックリストを用いてレポートをお互いにチェックします。

今後のスケジュール

11 週目 第 2 回チーム発表…学団内でチームレポートを発表

提出したチームレポートを授業担当者の責任で印刷しますので、それを使って他のチームに発表してください

冬休み課題：

- ・チーム学習の評価 2 (チーム)
- ・チーム発表の評価 2 (個人)
- ・チームの機能不全診断テスト結果 2 (チーム)
- ・最終レポートの構成(目標レポートレベルの設定)
- ・できるだけレポート執筆を進める

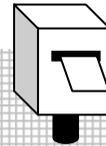
次週レポートをプリントアウトしてきてください

12 週目 冬休みに執筆したレポートを評価しあう(チェックリストを用いる)

13 週目 講義のまとめ レポートに関する質問受付 最終チェック

個人が提出 : A4 10 枚以上で最終レポート

チーム学習の評価 2(個人)



次週提出
シート

チーム番号() 氏名()

後半のチーム学習を振り返って、あなたの学習を評価してください。

A これまでのチーム学習で、メンバー間でお互いに連絡するためにどのような方法をとりましたか。

- 主として学習管理システムのチーム掲示板を利用した
- 主としてチームでつくったメーリングリストを使った
- 掲示板とメーリングリストとを併用した
- お互いに連絡先を交換して直接連絡をとりあった
- とくに連絡は取らなかった

★掲示板を使わなかった人に伺います。使用しなかった理由を教えてください。

()

B 連絡にはどのような機器(ケータイとパソコン)を使いましたか

- ケータイだけを利用した
- 主としてケータイを使い、一部はパソコンを利用した
- 主としてパソコンを利用し一部はケータイを利用した
- パソコンだけを使った
- その他、具体的には()

★パソコンを使用したと答えた人に伺います。主にどこで利用されましたか ()

C あなたのチーム学習の参加状況について教えてください。

●チーム学習で、あなたが担当したのはつぎのどの役割ですか。 ()

- ① 司会 ② 技術 ③ 記録整理 ④ 計画管理 ⑤ その他()

●あなたはその役割の担当者としてチームに貢献できましたか。

- 自分が担当した役割の意義を理解し、よく貢献できた
- 自分が担当した役割の意義は理解していたが、あまり貢献できなかった
- 自分が担当した役割の意義はあまり理解できなかったが、自分で判断してよく貢献した
- 自分が担当した役割の意義が理解できなかったため、あまり貢献できなかった
- 自分が担当した役割の意義が理解できなかったし、貢献するつもりもなかった

●チームの中で役割を担って学習してきたことを振り返って、不満に感じたこと、満足したこと、他のメンバーに感謝したいこと、謝罪したいことなど自由に記述してください。

裏もあります

D チームで考えたチーム学習の規範を常に意識することができましたか。次の表にチームで考えた規範を挙げて、自分はそれぞれの規範を守れたか守れなかったかをチェックしてください。

規範	きちんと守れた	まあまあ守れた	あまり守れなかった	全く守れなかった
例 掲示板に足跡を残す	✓			

E 限られた時間を有効に使って、チームでうまく学習計画を立てることができましたか。

() はい

() いいえ (理由: _____)

F 「02-8 教育実践力を身につけよう」に示してある1～15の「私の教育実践力」の中で、どんな力がつきましたか。また、力をつけたいと思ったけれども未だ身につけていないと思う力は何ですか。それぞれの教育実践力を1～4段階で評価してください。また、今後できるようになりたいと思うものには✓を付けましょう。

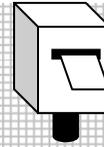
	私の教育実践力	現在の状態	今後の課題としたいものに✓を付ける
1	何事でも最後まで達成しようとする		
2	何事にも積極的に取り組める		
3	他の人を理解するように努めている		
4	自分のことをできるだけ冷静に認識できる		
5	他の人を説得したり影響を与えるように努めている		
6	チームワークを尊重しチームのために貢献できる		
7	情報を収集することが得意である		
8	物事を分析的に考えることができる		
9	物事を概念的あるいは抽象的に考えられる		
10	自分をコントロールして冷静に振舞える		
11	何事にも自信をもって取り組める		
12	まわりの状況を冷静に認識することができる		
13	まわりの状況に適応することができる		
14	他人とコミュニケーションをとることが苦痛でない		
15	物事を計画的に進めることができる		

4 : とてもよくできるようになった 3 : まあまあできるようになった

2 : あまりできていない 1 : 全くできていない

(もともと「得意」なものには◎をつけましょう)

チームの機能不全 診断テスト結果 2(チーム)



次週提出
シート

チーム番号()

再度「07-02 チームの機能不全診断テスト」に取り組み、その結果を以下の表にまとめてください。

氏名を書いてください	「1 信頼の欠如」の点数	「2 衝突への恐怖」の点数	「3 責任感の不足」の点数	「4 説明責任の回避」の点数	「5 結果への無関心」の点数

1回目のテストから変化しましたか？

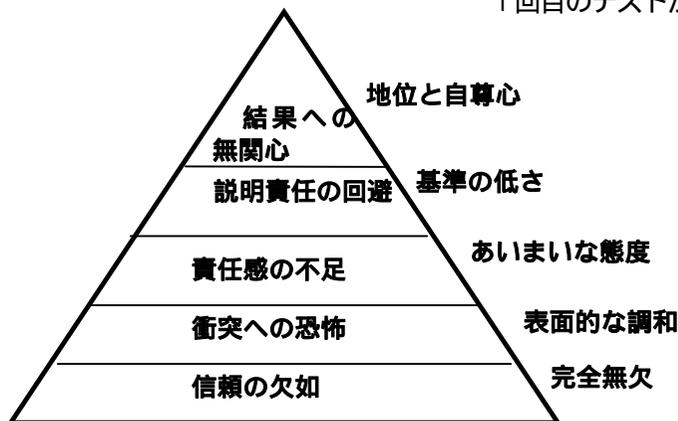


図1 チームの機能不全のモデル
P. トリック・レンシオーニ「あなたのチームは機能していますか」p.207 より

- 1 信頼の欠如 ...チーム内で弱みを見せないことから生じる。
 - 2 衝突への恐怖...腹を割って激しく意見をたたかわせない。あいまいな議論や慎重な発言が多い。
 - 3 責任感の不足...表面的に同意をするため、決定を支持し責任をもつことができない。
 - 4 説明責任の回避...チームのためにならない行動や態度をとった仲間をとがめるのに躊躇する
 - 5 結果への無関心...チーム全体の目標より個人のニーズや自分の部門のニーズを優先させる
- (以上は「あなたのチームは、機能していますか?」より教材作成者がまとめたもの

8～9点...チームに機能不全は現れていないと考えられる。

6～7点...機能不全が問題になる可能性がある。

3～5点...機能不全に対処する必要があると考えられる。

このページは白紙です

最終レポートの構成

最終レポートを書くときに、以下の説明をよく読んで確認してください。

最終レポートの構成

最終レポートは左の図で示しているように、4章構成で執筆します。

最終レポートの構成

Microsoft Word にて
A4(1200字設定)10枚以上
(図表の挿入可)

表紙・目次¹

1章：チームで構想した学校

2章：多様な能力を持

4章：この講義の感想と希望

自己評価票・公開同意書²った学習者一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

3章：チーム学習と学習成果の評価について(かより選択)

第1章は、1回目のショートレポートを修正したものを利用するとよいでしょう。

第2章は、2回目のショートレポートを修正したものを利用するとよいでしょう。

第3章は、かを選択してください。

2章を踏まえて多様な学習者の学習成果をどのように評価するか(例：到達度評価を行う等)を考案する。
チーム学習の体験をいかして、チーム学習を評価するならどのようなするかを考案する。

第4章は、この講座の感想を書いてください。

1・2 最初に表紙と目次、最後に自己評価票と公開同意書を入れてください。これは枚数には含まれません。

2 **自己評価票と公開同意書**・
ず最後に付記してください。

11-00-2 参照

レポートが目指しているレベル(選択して不要なものを削除する) (A* A B C)

** このレポートでアピールしたいポイント **

** レポートを次の視点で自己評価してください。(選択する) **

参考文献・引用文献、参照 URL を示すことが〔できた ・ できなかった〕

(盗作ではなく、自分の主張を展開するときの根拠として使用し、誰の文章やデータを使用したかについて表記しているかどうか)

「感想」(「だと思ふ」調)ではなく「論理」(「である」調)で主張〔できた ・ できなかった〕

読み手が読みやすいように配慮することが〔できた ・ できなかった〕

(長すぎる文章を羅列するのではなく小見出しをつけたか、図や表の表示量は適切であったか など)

レポート公開同意書

このレポートを後輩が受講する「教育方法学」で公開してもよいですか。番号を選択してください。

後輩への公開について()

1. 実名入りで公開してもかまいません
2. 公開してもかまいませんが、匿名を希望します
3. 公開しては困ります

2005 年 月 日 氏名()

これまでの教育方法学で提出された最終レポートで「同意書」で「実名入りで公開してもかまいません」あるいは「公開してもかまいませんが、匿名を希望します」としたレポートです。参考にしてください。

最終レポートのメモ

最終レポートを書くためのメモを作っていきます。それぞれの章で、あなたはどのようなことを強調したいですか。

1章

2章

3章

4章

目標レベル (A* A B C) 11-00-2 参照。いずれか1つに をつける

12 週

学習成果を評価しよう

今週の目標：

- ・ 後半のチーム学習を評価する
- ・ チーム内でお互いの最終レポートをチェックしあう

演習 (1) 後半のチーム学習を評価する

>>11-1 チーム発表の評価 2 (チーム) 11-3 チームの機能不全診断テスト結果 2 (チーム)

前回の第 2 回チーム発表で、他チームに書いてもらった評価シートをまとめて検討しなければならない部分を明らかにしましょう。また、後半のチーム学習が前半からどのように変化したかを「チームの機能不全診断テスト結果 2 (チーム)」の表にまとめて確認し、他のメンバーの「チーム学習の評価 2 (個人)」をみて、それぞれがどのようにチーム学習に参加し、どのように考えていたかを知りましょう。

提出

11-2 チーム学習の評価 2 (個人)

11-3 チームの機能不全診断テスト結果 2 (チーム)

11-1 チーム発表の評価 2 (チーム)は手元に残して最終レポートの資料として活用してください。

演習 (2) チーム内でお互いの最終レポートをチェックしあう >>12-1 レポートチェックリスト

これまでの 2 回のチーム発表と、2 回のショートレポートの提出によって、最終レポートの執筆も進み、完成に近づいていることだと思います。学習管理システムへの提出の締切である **来週の 23:50** までに不足なところを修正できるように、チーム内でチェックリストを利用してお互いに確認しあいましょう。

今後のスケジュール

12 週目 冬休みに執筆したレポートを評価しあう(チェックリストを用いる)

13 週目 講義のまとめ レポートに関する質問受付 最終チェック

個人提出 : A4 10 枚以上で**最終レポートを学習管理システムに提出** 23:50 締切

なんらかのトラブルで提出できなかった場合は、名前と提出できなかった事情とすぐつながる連絡先(例: 携帯のアドレスなど)を記載した上担当者まで添付ファイルで送ってください。

このページは白紙です

レポートチェックリスト

チーム番号() 月 日() 氏名()

執筆できたところまでのレポートを読み、以下の点をチェックしてください。

なお、各リストの詳細については必ず「07-4 レポートの執筆」や「11-4 最終レポートの構成」を確認した上で判断してください。

リスト	項目ごとに評価記号を入れる						注意点
	例	A	B	C	D	E	
タイトル、学籍番号、学科、回生、名前、チーム番号が示されている							レポートの最初に書く
フォントの大きさ(基本 10.5)や字数や行数は規定どおりである							40 字 × 30 行の 1200 字
挿入された図表の割合は適切である。(半分以上の割合は好ましくない)							
読みやすく工夫されている							文章を長く続けず、段落や小見出しをつくる
10 枚以上書けている							表紙や自己評価・公開同意書は枚数に含まない
参考・引用文献や URL が示されている	×						07-4-2 参照
「だと思います」ではなく、「である」調を用いている	×						「ですます」調と「である」調を混合しない
データや資料などを使用して論理的説得力のある文章が書けている							考えの根拠が具体的に示されている
目標レベルの条件をクリアしている	×						11-0-2 参照
最後に「自己評価と公開同意書」が付記されている							11-4-1 参照

…できている …ほぼよいが少し改善を要する ×…検討しなおす必要あり

評価者

	氏名	コメント
例		レベル A を目指しているのに参考文献が最後に示されていない。
A		
B		
C		
D		
E		

その他注意点…ファイル名は必ず「学籍番号-チーム番号-氏名」(0312-3456-A3-山田一郎)に変更して提出

なんらかの事情で学習管理システムに提出できなかった場合は、氏名と提出できなかった事情とすぐ連絡できる連絡先(例:携帯アドレス)を記入した上で、添付ファイルにて担当者へ送ってください。

このページは白紙です

13 週

授業のまとめ

今週の目標：

- ・ 教職科目「教育方法学」の設計の原理を振り返る
- ・ レポートを提出する前の最終チェックを行い、不明な点があれば質問する

講義 (1) 教職科目「教育の技術と方法」の設計の原理 >>13-1

13 回の学習を重ねてきた道筋を振り返りながら、教職科目「教育の技術と方法」がどのように設計されていたかを紹介します。この講義のコンセプトは、第 1 週目から第 3 週目にかけて説明していますが、それらの内容を改めてここで思い出してみてください。この講義のテーマもまた、みなさんが後半の学習でとりくんできた共通テーマと同じように、「多様な能力を持った学習者一人ひとりの学力を高めるために」どうすればよいかということ根底に位置づけています。したがって、この講義のサブテーマは「多様な学習者が協働して知識創造をする力を養うためのチーム学習」を基本にしています。

演習 (2) レポートを提出する前の最終チェックをする

>>07-4 レポートの執筆 11-4 最終レポートの構成 12-1 レポートチェックリスト

みなさんの努力の結晶である最終レポートの提出締め切りを守りましょう。さまざまな手違いや勘違いによって単位を落とすことの無いように、最後の確認を行いましょう。

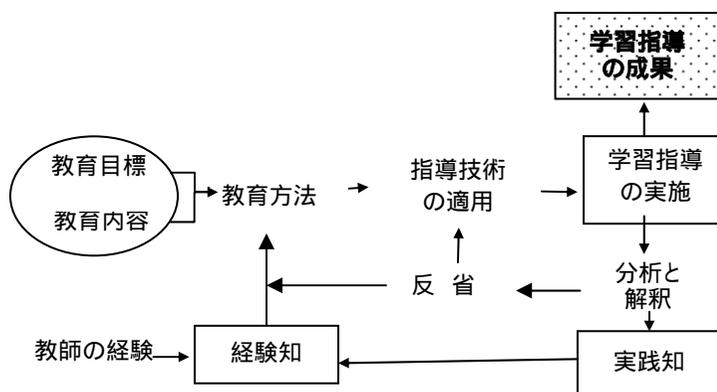
また、これまでの資料を確認し、かつチームメンバーに質問しても解決できなかった疑問点があれば、指導者に質問してください。

このページは白紙です

情報社会における授業設計と教育技術

これまでの授業と学習者

この授業では、他の授業とは違って、皆さんが主体的に活動したことと思います。また、同じチームの人や他のチームの人から多くのものを学んだことでしょう。この授業はこれまでの授業とはまったく異なる考え方で設計されています。これまでの教育では、教育理念と教育内容が最初にあり、それを実現するために授業が計画され準備され、そして実施されています。学校教育での学習指導の基本としては文部科学省から発行されている学習指導要領が基本であり、教育内容は学年ごとに配当されていて、それに基づいてつくられている教科書が教育内容として示されています。教師はその内容をどのようにして上手に教えるかということが課題になっています。このときの様子はつぎのように示すことができるでしょう。



この構造は大学の教育でも同じです。授業担当者が教育内容をあらかじめ準備して、それを伝達することが重視されています。それが講義形式の授業であり、さらに理解を確実にするために演習科目が課されています。

変動社会における授業と学習者

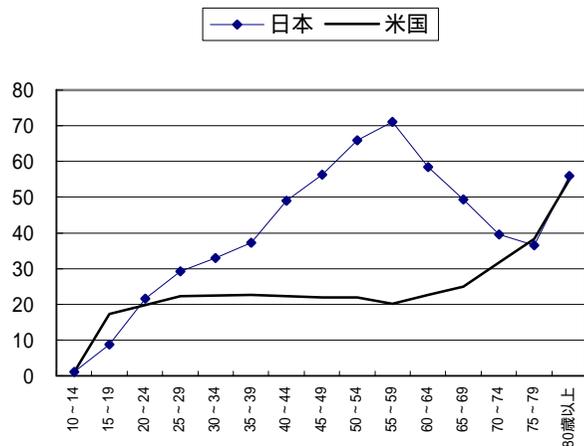
以上のような見方に対して、もう一つの教育の考え方があります。それは児童生徒、大学生、成人など学習者を中心としたもので、一人ひとりの学力レベルに対応する学習を提供することを目指すものです。情報通信技術(ICT)の発達によって、このような授業を実現することが可能になってきています。一人ひとりの学習レベルに対応するためにいつも少人数クラスで教育することは経費の面からも人材の問題からも不可能ですから、そのようなニーズに応えるためには、いつでもどこでも生涯にわたって学

習できるように環境を整備して，学習者が自己責任で学習する必要があります．

情報社会は変動社会

情報社会は変動社会ともいわれています．社会がたえず変動して失業と転職が日常化する社会であり．ニーズがますます多様化する社会でもあります．このような社会に対応を誤ると社会からの脱落者が増加します．右の表に示しているのは年齢別の男子の自殺率で，10万人当たりの人数です(2003年)．日本では以前は20才代の自殺が多かったの

年齢別自殺率(10万人当たり，男子のみ，日米比較)



Honkawa Data Tribune 社会実情データ図録
<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>より作成

ですが、最近では中高年の働き盛りの人の自殺が一番多くなっています．これは経済・生活問題の理由によるもので，アメリカの3倍以上の値になっていることが注目されます．このようにどのような年齢であってもいつ経済的に破綻するかわからないというのが情報社会の特徴です．

幸いにもインターネットでさまざまな情報を入手することができるし，さまざまなメディアに大量の情報が蓄積されているのでそれを利用することができます．また，誰もが最新の情報に接することができるようになったこと，また気軽に学習できるようなさまざまな教材が開発されて自分で学ぶことができるようになったこともあって，自律的に学習することが情報社会ではとくに大切です．たとえばヨーロッパ共同体(EC)の目標の一つとして持続的雇用可能性(sustainable employability)を生涯にわたって保障するという計画があります．情報社会では自律的学習を実現することが大切ですので，教師も自律的学習を目指す授業を設計できる能力を習得していなければなりません．子ども達の興味関心にまかせていれば学習が成立するだろうと考えるのは間違いで，それでは「活動すれども学習せず」という状況になってしまいます．

情報社会における学習者モデル

これまでも体験してきたように，自律的な学習が成立するためには皆さんが学習

の主体者としての責任感をもって活動しないと授業はうまく展開しません．そこでこの授業では最初にも強調したようにつぎのような学習者モデルを考えました．

情報通信技術(ICT, Information and Communication Technology)時代においては、つぎのような学習者モデルが期待されています。

誰でもインターネットや図書ならびにさまざまな資料を通じて、最新の知識を入手できる。

教師や指導者が情報や正しい知識を独占している状況は過去のものである。

すべての人が単なる知識の消費者としてではなく知識の生産者として成長することができる。

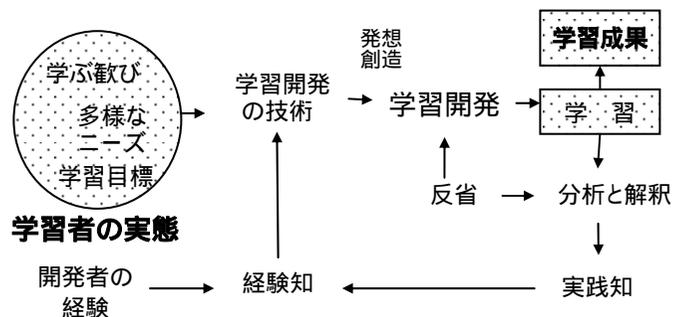
= 知識消費者モデルから知識生産者モデルへ

講座にはさまざまな経験をもつ人材が参加しており、お互いに学ぶことによって創造的な活動が期待できる。

他人との競争による勉強から、多様性のある学友や同僚と協力しながら学ぶ構えに変革することができる。

学習する内容を個人の教養重視からさらに社会貢献と生活維持をめざす社会的に有用な能力の習得へと拡大することができる。

このような学習者モデルを前提としたときに、授業設計はつぎの図のような手順として表現することができるでしょう．ここでは学習者の実態から出発することになります．このような枠組みの授業設計の研究はまだ始まったばかりですから、今後の発展に待たなければなりません．新しい教育技術が求められています．その技術はまず何よりも学習者の実態を理解することから始まります．



そして学習する過程について予測する能力をもたなければなりません．設計とは予測することでもあるからです．そのような予測能力はそれほど簡単に体得されるものではなく、しっかりとした研究方法を習得する必要があります．各国が競って教師教育のレベルを上げているのもこのような理由によるものです．

情報社会における教師の技術

これからはさまざまな生活経験と家庭背景と地域社会の環境を背負った子ども達が教室の中に入ってきます．これは日本だけの問題ではなく、世界的な現象です．アメリカはもともと移民によって発達した国ですから多民族ですが、ヨーロッパは現在ヨ

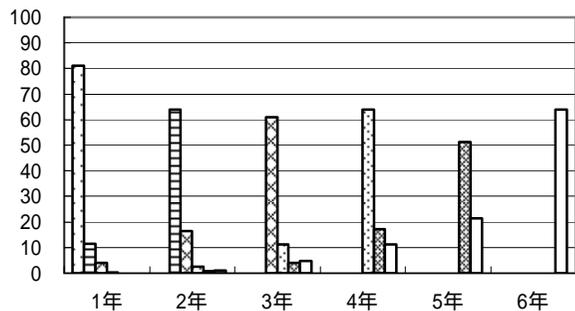
ーロッパ連合(Europe Union)を目指してさまざまな努力がなされていますが、なかでもそれぞれの国の言語や文化の違いを、むしろ多様性のもたらす経済的文化的活力として活かす方向での努力が重ねられています。最近の学力調査の結果から、たとえば算数についてみてもイギリスやフィンランドなどが急速に学力向上を達成してきていますが、日本はむしろ低レベルの子どもの指導が困難になっていてますます学力不足が心配されます。その理由は、わが国の教室にも多様な学力の子どもがいるのですが、それに対して習熟度別指導が行われているものの学校単位あるいは教師単位での取り組みがなされているものの、ネットワークを活用しての地域あるいは全国レベルで協力体制を確立して、個人を対象とした指導用教材の開発や評価などの対応がまだとれていないからです。下の図は「学力の社会学」(2004, 荻谷)の中のデータから作成したものです。データで示されている1年相当、2年相当という段階をレベル1、レベル2と読みかえて作成したもので

す。上のグラフはそれぞれの学年でレベル以上に達している児童の割合を示したものであり、下の図は学年相当のレベルに達していない児童の割合です。このようにわが国でも6年生になると5年生相当の問題に正解できない児童の割合はかなり多くなります。皆さんはこのような実態の教室で教えることになります。したがってこのような実態に対してどのような学習指導法を開発するかが課題です。

変動社会あるいは多様化した学習者に対応するために各国でさまざまな試みがなされています。わが国にも比較的よく紹介されているイギリスの例では、学年制を廃止して中学校修了(15才)までを4つのキーステージに分けて、個人ごとの学習の進度を管理していま

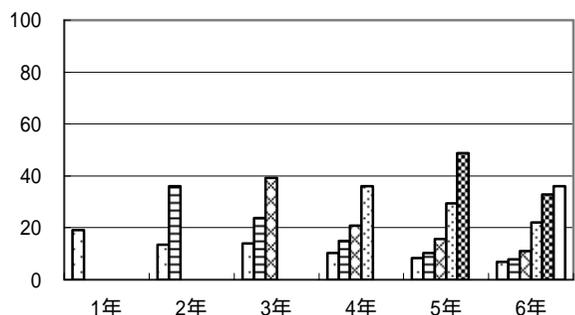
当該学年以上の問題に正答できた児童の割合(2004, 荻谷)

□レベル1 □レベル2 □レベル3 □レベル4 □レベル5 □レベル6

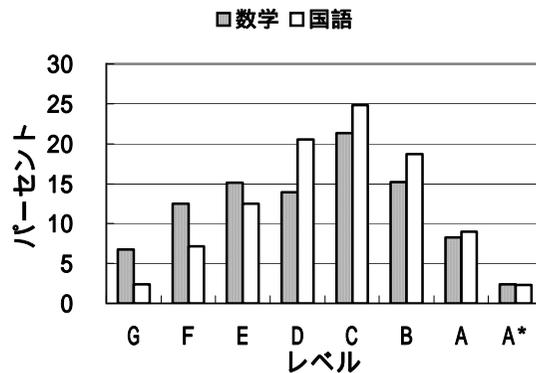


当該学年以下の問題に正答できなかった児童の割合(2004, 荻谷他)

□レベル1 □レベル2 □レベル3 □レベル4 □レベル5 □レベル6



す .最初はレベル 1 からレベル 10 までの 10 段階で計画していましたが ,教師が慣れておらず混乱したので現在では G から A までと A* の 8 段階になっています . A* はイギリス社会が認めている 5 パーセント以内での特別の才能をもった人材で ,この人達にもその能力に応じた教育の機会が与えられています .

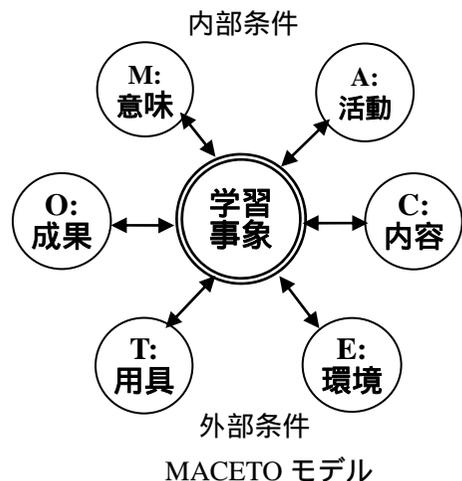


イギリスの15才のGCSEのレベル別分布(1997年)

全国共通カリキュラム(National Curriculum)を導入するときに ,このような段階別の試験制度が整備された結果 , 15 才で受験する中等教育一般証書の GCSE (General Certificate of Secondary Education)の資格取得者は図のようになっていて(1997 年) , 15 才でも小学校 1-2 年に相当する G の学力しかない人がいることを認めています .しかし 15 才で C 以上の学力を期待していて ,それ以下の子どもも含めて一人ひとりに指導できる教材の整備が進められており ,各自が自律的に学習を進めることが期待されています .

全ヨーロッパをカバーして携帯電話や電子手帳を活用した m-Learning を普及する汎ヨーロッパ研究開発プログラム (<http://www.m-learning.org/index.shtml>) が開始されています .これはとくに 16 - 24 才の若者たちのためにスタートしたもので ,社会的にもっとも無視されやすい人たちのためのプログラムです .学校教育で失敗し ,十分に読み書きができず単純な計算にも問題のある人達で ,現状ではどの教育訓練機関でも十分に教育が受けられない人達を対象としたプログラムです .この人達は失業 ,能力以下の就業 ,あるいはホームレスです .その人達に届きうるもっとも有効な通信手段は何か .それが mobile phone すなわち携帯電話です .

わが国の教育の現状はまだ一人ひとりの学習者のニーズに十分に応えるほどにはなっていませんが ,皆さんが教師になるころには教育はそのような方向に動いているでしょう .この授業では ,皆さんが学習にできるだけ積極的にかかわるように留意してきましたが ,そのために開発中の MACETO モデルを利用して設計しまし



た．ここで M は Meaning(意味)，A は Action(活動)，C は Contents(内容)，E は Environment(環境)，T は Tool(用具)，O は Outcomes(成果)を表しています．普通の授業では教育内容からスタートして，学習環境を整えることから考えるのですが，この授業ではどのようなテーマと内容を準備すれば皆さんが学ぶことの意味を実感しながら学習できるかを考えて設計しています．このときにつぎのような仮説で授業を設計してきました．

仮説：学習者の内的条件を整えることに成功するならば，外的条件が十分でない場合でもその困難を克服して自律的学習を実現することができる．

さらにこの授業ではチーム学習を経験しましたが，そのときにつぎの5つの規範 ACCRR を参考にして各チームで自分達の規範を考えました．

自律(Autonomy)：自分で学習を計画し実行する

協働(Collaboration)：他の人と共に学ぶ

貢献(Contribution)：チームのために積極的に協力し貢献する

責任(Responsibility)：自分が分担する役割や仕事について責任をもつ

敬意(Respect)：他の人の努力や作品などに敬意を払い尊敬する

規範は外部から強制的に与えられると反発したくなりますが，それを受け入れるように配慮されているか自分達で決めれば比較的良好に守られます．しかし自分達でゼロから決めようとする時，合意するのに時間を要するので，どこまで与えるかはその時その時の実態に合わせてなければなりません．

研究者としての教師

教育問題はますます複雑化し，深刻になっているようにみえますが，これはわが国だけの問題ではなく，世界のあらゆる国が当面している課題です．それだけに各国の研究者や教師がこの問題に取り組んでおり，しだいに問題もはっきりとしてくるでしょう．情報社会あるいは変動社会での教育はこれまでの教育とはかなり異なったものになる可能性も秘めています．そのためにも今後は「研究者としての教師」が求められているのです．そのような教育はこの授業でも経験したようにプリント教材でもかなり実現できることですが，さらにコンピュータとインターネットを活用するだけでなく，ケータイや電子手帳をはじめ現在急速に進歩しているユビキタス情報機器(ユビキタスとは至るところに存在するという意味)が整備されるにしたがって，すべての人が自律的に学習できるような学習社会を実現することも夢ではありません．

u- 学びの学習開発技術

u-学び(universal and ubiquitous learning)とは

u-学びとは u-learning のことですが、これは universal and ubiquitous learning の意味で使用しています。ここで universal とは万人のためのという意味で使用しており、ubiquitous はラテン語からきたもので神がどこにでもいつでも遍在するという意味で使われています。現在、情報通信技術 (ICT, Information and Communication Technology) が教育の分野においても広く活用されています。そのような学習として e-learning, u-learning, m-learning などがあります。これらはいずれもすでに専門用語として使用されるようになっていて、インターネットの Google で検索してみるとつぎのような頻度になっています。(2005.1.11)

e-learning	約 11,600,000 件
u-learning	9,030 件
m-learning	約 530,000 件

ここで m-learning は mobile learning のことです。また u-learning は ubiquitous learning ともいわれているので、この用語で検索するとつぎのようになります。

ubiquitous learning 約 621,000 件

以上は全世界での件数です。それにたいし日本国内のみに限定して検索するとつぎのようになります。

e-ラーニング, e-学習, e-learning 関連の合計	4,770,000 件
ユビキタス学習関連の合計	33,700 件

以上のように研究や実践は活発に行われていますが、ここで注目したいのはこのような情報通信技術 ICT が変動社会においてのどのような問題を解決するために活用されようとしているかです。情報社会は一面では経済的な条件によって恵まれている人と恵まれていない人との格差を大きくする可能性もあるし、福祉や雇用問題とも関連して恵まれていない人々に学習の機会を提供する可能性も秘めています。したがって、ICT を活用するにあたっては自分の目的を明確にする必要があります。

u-学び(universal and ubiquitous learning)のさまざま

u-学びはどのようなものか

u-学びが目指す学習

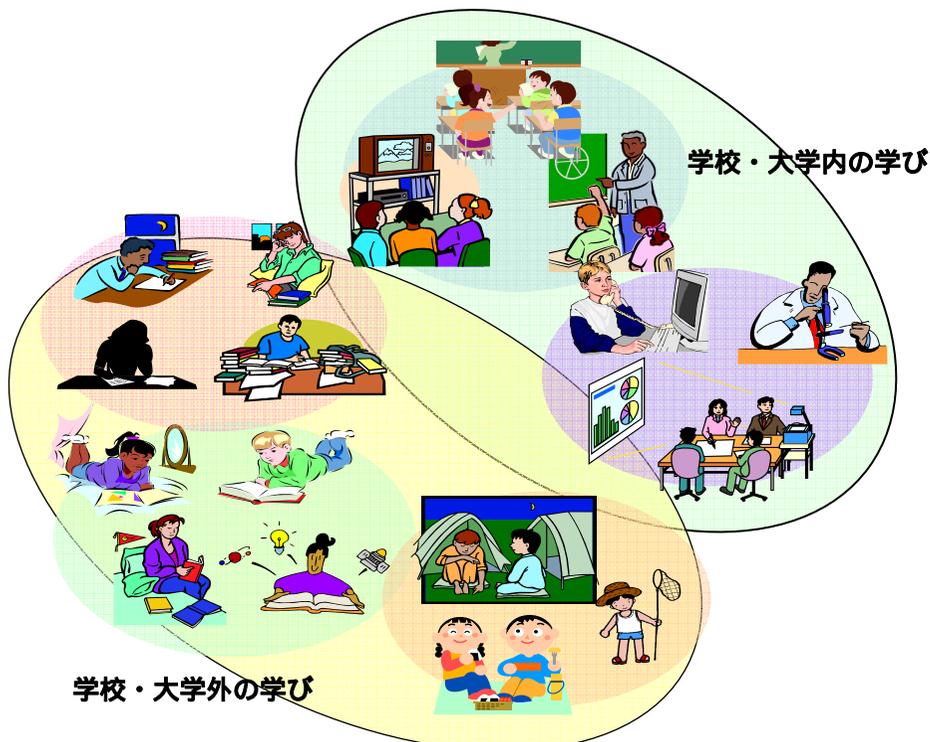
- 生活権としての学習する権利を保障する学び
- 進学・進級のための学び
- 日常的な家庭での学び
- 義務から開放された学び

人はあらゆるものから学ぶ

- 友達から学ぶ, 同僚から学ぶ
- 教師から学ぶ, 家族から学ぶ
- 自然から学ぶ, 環境から学ぶ
- おもちゃで学ぶ, 模型で学ぶ
- 図書から学ぶ, 新聞から学ぶ
- インターネットから学ぶ, テレビから学ぶ

ユビキタス ICT 時代の学習者モデル

- 子どもも学生も大人も等しく最新の情報に接することができる
- 教師が子どもや学生よりもよく理解しているという前提が成り立たない
- ケータイ文化では子どもや若者が先住民であり, 大人は遅れてきた移住民である



学習開発の技術

1. 学習開発の原理

- a. 変動社会，多様性，少子化社会で学ぶ権利と学習開発
- b. 「生きる力」としての能力開発と社会での認定
- c. 学習開発をするための教育技術

2. 学習分析技術

- a. 学習者理解
 - i. 観察記録法
 - ii. インタビュー法
 - 1) 面接法
 - 2) メール法
 - iii. 調査紙法
- b. 学習過程分析
 - i. 録音・録画の方法とプロトコル作成
 - ii. コード化とカテゴリー分析などの定量的分析
 - iii. 縦断的なデータの質的分析と解釈
 - iv. コミュニケーション分析
 - v. 子どもについての理解の記述方法

3. 学習設計技術

- a. 学習目標の構造と記述
 - i. 行為動詞の選別と使用方法
 - ii. 到達目標と向上目標
- b. 学習過程の予測と記述方法
 - i. イメージ・図式モデル・命題
 - ii. 記号・図式モデルの記述方法
 - iii. モデル(MACETO)と学習事象
 - iv. 学習事象の系列化
- c. 判断命題の記述方法
 - i. 行為にいたる判断と技術
 - ii. 規範命題から実践的三段論法による行為
- d. 学習環境の設計とアフォーダンス

4. 学習指導実施技術

- a. 説明，指示，相談など
- b. 学習環境の設営と運用

5. 学習評価技術

- a. 診断的評価・形成的評価・総括的評価
- b. 目標達成の指標と評価
- c. 目標記述とルブリック
- d. 到達度評価とポートフォリオ

6. ICT 活用技術

- a. データ解析の技術
- b. 資材管理システムの運用
- c. 通信システムの構築と運用
- d. コピキタス機器(ケータイと電子手帳など)の活用技術

今後の連絡先

NPO 法人学習開発研究所

e-Mail: nisinohr@u-manabi.org

URL: <http://www.u-manabi.org>